

No. 1

芥川だより

発行日/2006年7月20日

発行人 梵 ぼん

高槻市芥川町2-14-3

TEL 072-681-8870

創刊の辞

梵 店主 下村 嘉明



世の中で、一番おもしろいものは人である。
 何を食べるかというより、誰と食べるかが重要であり、
 何処へ旅するかというより、誰と行くかが問題なのであります。
 人のおもしろさとは、一体どんな様子なのでありましょう。
 テレビや新聞など情報は溢れんばかりです。
 この上、どんな情報が必要なのかと疑問に思われる方もありましょうが、

芥川だよりは、身近な人の生き様について、さらに、おもしろさ、おかしさを伝えていきたいと思ひます。
 中傷や批判は控え、人のおもしろさに迫りたく思ひております。普通の人が如何に、おもしろい人生を生きたか、今生きている人が如何におもしろいかを追求したく思ひ発刊することにしました。
 毎月1回発行して、皆様の御支持が得られれば続けていきたく思ひますので、何卒、投稿等よろしくお願ひ致します。

芥川商店街歳時記

今月の予定

7/29(日) 午後6時～ 夜市	毎年恒例の楽しい、芥川商店街の組合員による夜市があります。今年も多くの人出が予想される。皆さん遊びに来て、楽しんで下さい。模擬店は、スマートボール、おもちゃ、やきとり、金魚すくい、焼きそば、綿菓子、かき氷、鈴虫、フランクコーン、ヨーヨー、ビール、芥川小PTA協賛店など。(雨天の場合、翌7月30日に順延)
8/5(土)～6(日) 高槻まつり	祭りには、芥川からは、みこしを担いで参加します。小さく見えますが、これがかなり重たい。6日の6時57分桃園小のステージ、その前後2回、芥川商店街を練り歩きます。5時半、7時半。前後かと思われます。皆様見て下さい。

芥川の写真屋さん

広告主募集

年齢不同の童心を応援します。

Food Pantry

広告主募集

おかげさまで、今月29日で開店1周年になります。皆様のご支援に、深く感謝しております。

年中無休、24時間営業をしていますと、老若男女を問わず、あらゆる方々が来店されます。そこには、様々な人間模様があります。それを楽しく伝えたく思っております。

初回は、元気なおじいちゃんの話です。オーブンしてすぐ、ほぼ毎日、白いトレーニングウェアを着た80歳過ぎの老紳士が、朝の6時頃来店され、サンスポをかならず買われます。ところが、10月下旬をさかいにピタリと来られなくなりました。体の調子でも悪いのか、あるいは、散歩のコースの変更かな、いろいろ考えておりました。毎日見ているお客が来られなくなると寂しく思うものです。

年が明け、2月初旬の頃、まだ早朝は、薄暗く、寒い時でした。4ヶ月ぶりに、老紳士が、いつものトレーニングウェアの上に緑のジャンパーを着て、サンスポを買いに来ってくれたんです。思わず、お久しぶりです、長い間どうされていたんですか。と聞くと、おじいちゃんは、ケロッとした顔で、プロ野球がなかったやろ、またオーブン戦が始まるから、阪神の事が知りたくて買いに来たんや。それを聞くと、これまでの心配は吹き飛びました。

それから、2006年プロ野球が開幕し、阪神が勝った翌日は、その話題が、おじいちゃんとの挨拶代わりになっているこの頃です。

次号につづく

「保険には、ダイヤモンドの輝きもなければ、パソコンの便利さもありません。けれども、目に見えぬこの商品には、人間の血が通っています。・・・」

これは、日本生命のコマーシャルに使われている「詩」です、いい「詩」だなあといつも思いながら、血の通った仕事をしなければと肝に銘じている。

5年前、妻の反対を押し切って郵便局を辞めた。この商店街で店を出したかった。

当時は店舗を構えた保険の代理店はコストもかかるのでほとんどなかったが今ではこの業界の主流になりつつある。「安心、安全、心暖かい商店街」

ここなら、血の通った仕事が出来ると思った。

今回、「芥川だより」の創刊に当たり、下村さんから投稿の依頼があった。「保険の話して、何かおもしろい話がないか・・・」ということであった。

「面白い話ですか？・・・例えば？」とたずねると、「保険業界の裏話とか・・・」ということであった。

なるほど・・・下村さんも、保険嫌いとはまではいかないまでも、多少の不安があるのかな？とか思いつつ「下村さん！？」「いつ保険に入るのが一番得か教えてくださいか！？」と少し笑顔尋ねると、下村さんは「教えてください！！！」と真剣な顔いので・・・「こんな話は、お得意様にしかお教えしていませんから・・・あまり言わないでくださいね！」と念押ししながら「いいですか。保険には〇〇〇〇に入るのいいんです。」と教えてあげました。

下村さんは「ん・・・なるほど・・・なるほど・・・！！？」と帰っていきました。が、いまだに未だ保険に入りに来てくれません。

次号につづく

総合保険事務所

なつかしく思い出してみよう。あの日、あの頃を。
私の青春時代は、まだ男女7歳にして席を同じゅうせず、と言われ、今のようふたりで肩よせ合って歩くなど、まるで考えられなかった。

さて、見合いの日がきまった。あとにも、さきにもないような大雪、大阪では想像もつかないだろう。

50センチ以上の雪をかき分けると体が埋もれてしまうぐらい。

こんな田舎の娘さんなんか。良人曰く。それがたった1回だけの見合い、そして男側が、出されたお茶を飲めば、OKという合図。

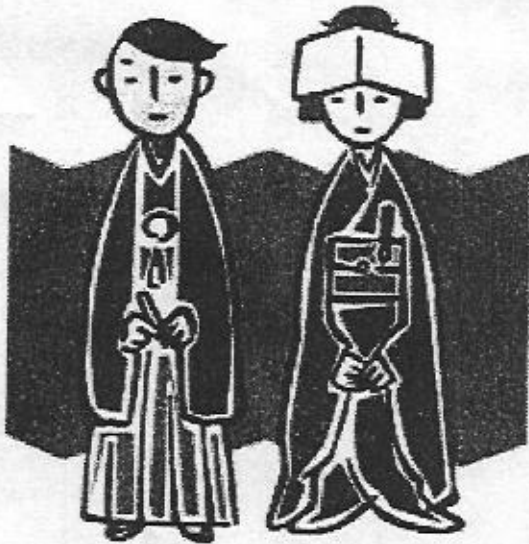
私側は茶を飲まずに、よろしくたのみます。仲人さんと親との話し合いだったらしい。私はどうなるの、戦後の23年3月23日、大安吉日だったのか、ああ、結婚。どうしたらいいの、どうすればいいの、必死で自問自答しつつ、全く知らない土地へ、母は気強く、他家へ嫁いだら2度と実家の敷居をまたぐな。きつい躰をかけての嫁入り、トラックの人となる。遠ざかってゆく山、故郷をあとに、雪にうずもれた道。

このトラック大丈夫かなあと不安な気持ちちがよぎってゆく、ウン、スウもいわず駅に着く。どうやら目的地までの安否で、道路交通を聞くためだったらしい、相野辺りかなと思う。やっぱり大雪で通れないとのこと、汽車で行って下さい。婚礼の荷物は届けますという。芝居の役者よろしく汽車に10人。皆から、異常な視線をあてられ、赤面、恥じらいつつ、やっとの思いで、婚家の親戚宅へ着いた。途端に紋付姿の小父さん達が、チョウチンを振りかざして、ご苦労さん待ってましたんや、と言う言葉。えっ、なんで、こんなしんどい思いをして、少し休ませて、お茶が飲みたいと言ったけれど通じ合わず、正座させられて、仲人はん、父、親類の人たち、次から次へと、あいさつ、それがすんで、やっど、お茶にありつく。

結婚式は、まだまだ。荷物がトラックの上、待つこと5時間、ああ、やっど荷物が着いた。髪結いさん、着物の入っているのは、どれですよ、はようしないと夜が明けてしまう。狐の嫁入りや、こんな夜中に嫁はんの着付けは始めてや、とぼやくことしきり。12時

一人前に出来上がった花嫁はん、角つこの電柱の所まで、手を引かれて歩いて、ああしんど、と振り返ってみたら、後向くのは縁起が悪い。もうちよつとガマンしてや、仲人はんがいう。その時、嫁はんが来はったで、と声を張り上げて待ってくれた人が、現代一人だけ生きて居られ、いまだに、懐かしそうに話がつづいてゆく。ああ・結婚式。

ちようちに迎えられて、家の中へ、誰が誰だかさっぱりわからない。自分の良人となる人の顔さえわからない。私の横へ座ったお方が、これから先、将来を共にする人なのだ、三々九度の盃も、高砂の謡も、頭の中をかすめただけで、ああ、結婚式も終わった。



次号につづく

雨の降る日は、来店する客が少ない。当店のように、中高年の女性が対象の店では、当然といえば当然である。しかし、客は少ないが、そのような日にかぎり、おもしろい人が来る。

その日も、客がなく暇だった。商売をやっていると、客が入って来る瞬間、この客は、買う客か、そうでないかが感で決めたがる癖がつく。実際は外れる事も多いのだが。経験から、そのように思いたがる習性があるらしい。

その客は、男性で50歳ぐらいと見た。当店では、男性の客は、珍しいので、冷やかしかないと判断した訳である。まして男性であり、僧衣を身に着けていたことも手伝って、私は、相手が、男性で、自分より年下、まず買うことはないだろうと思ひ、普段、友人に話しするように気楽に話しかけた。

僧は、私の話し方が気に入らないからか、何か対抗意識を感じるような話し方になった。その時、私も、何か失礼な言葉を使ったか気になったが、さほどの失態を犯したとは、その時は考えなかった。僧の語るところによれば、

私は、京都の有名なXX寺の跡継ぎであり、修行の為に奈良の〇〇寺に居る。今日は、高槻で一軒だけある檀家に用があり来た。旧家の方が亡くなると、コレクションされて、いた着物等が寄贈されることがある。自分は高僧だから、自由に見えるし、譲受もある。寺の僧達は、ほとんど、着物などには、興味は無いから。江戸時代の小袖なども、自分はコレクションしている。だから、古い着物や布については興味がある。

次号につづく

投稿記事大募集

「芥川だより」に

あなたの「日々思うこと」や「身近に起こった出来事」など投稿してみませんか？

当方にて編集し記事にさせていただきます。お題目は自由ですのでお気軽に投稿してください。

投稿を希望される方は、原稿用紙かメールでお送り下さい。

なお投稿いただきました原稿は返却いたしませんのでご了承ください。

編集後記

今回、創刊号を発行するにあたり、原稿や、広告に協賛していただいた皆様に改めてお礼申し上げます。

今後ともよろしく御協力お願いします。さあ、2号の原稿集め、広告依頼にがんばろう。

私は、己の教育も子供の躰も上手く出来なかった。周りの友達などは、上手くやっている様に見える。皆さんに投稿をおねがいする以上、自分のこれまでの生き様を書かねばならない。

京都の北西にあたる丹波の山村で、私は生まれ育った。戸数が20戸足らず、両側を谷に挟まれ、由良川の河岸段丘の上に山が迫って来ている小さな村である。昭和26年、うさぎ年の生まれ。当時は、まだ幼稚園もなく、小学校まで山道を歩いて、片道40分。和知中学、須知高校へは、山陰線の汽車、バスを乗りついて通学した。大学は京都の同志社。在学中は、学園紛争で封鎖があり、試験が少なくレポートが多く、ほとんど勉強していない。アルバイトと山岳部に明け暮れた4年間。卒業後、証券会社に入ったが、ヒマラヤの山行きの為に一年程で退社。28歳ぐらいまで、アルバイトをしながら、登山や山岳部のコーチを楽しんでいた。

ヒマラヤ乞食と言うぐらい、海外登山の為に、会社を辞めた知り合いも多い。その後、父親が脳血栓で倒れ、山どころではなくなつた。ところが、私の経歴と性格では、サラリーマンになれない。見るに見かねた、山岳部の先輩が金と知恵を出してくれて、今の商売に繋がった。先輩は、ほんとうに有り難い。お客様は、もっと有り難い。